

シェイクスピアの宗教観

郡司 郁

日本大学大学院総合社会情報研究科

Shakespeare and Religion

GUNJI Fumi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In recent years, rereading the Shakespeare work from viewpoints, such as gender and sexuality, has been widely studied from the flow of feminism criticism. However, on the other hand, rereading the Shakespeare work is seldom studied from a viewpoint of a pious Christianity writer. Therefore, I would like to focus on Shakespeare as a Christian and to try to find out the truth about the relationship between his view of Christianity and his work in the British society of his time.

1.はじめに

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare 1564-1616) に関しては、17 世紀から現代に至るまで様々な角度から研究がなされてきた。その膨大な先行研究のすべてに目を通すことは不可能である。したがって、シェイクスピア研究に関して、筆者の知識の範囲内においてであるが、決定的な解答が提示され得ていないと考えられる諸問題のうち、本稿ではシェイクスピアの宗教観あるいは信仰について追究することとしたい。

筆者はかつて『リア王』(King Lear, 1606)に関する拙論 *The Politics of Revision: King Lear into King Lear* において、英仏の戦争が重要なストーリーとして語られるが、これはホリンシェッド (Raphaell Holinshed) の種本¹の中でも語られており、勝敗の書きかえが行われていると論じた。ホリンシェッドの場合、フランス側の勝利で終わるが、シェイクスピアは『リア王』の中でそれをイギリス側の勝利と書きかえている。つまり、イギリスは英国国教会、フランスはカトリックを表していると思えば、英仏の戦争とは英国国教会とカトリックとの宗教闘

争を表し、シェイクスピアがイギリス側の勝利と書きかえたのは、結局、英国国教会の勝利を意図したのであると結論付けた。実際 1605 年に火薬庫爆発事件²があり、これはカトリック教徒が起こしたクーデターであるが、この事件以来いっそうカトリック教徒を厳しく監視するようになったのである。つまり、イギリス社会の宗教闘争が『リア王』に表象されていたとした。また『マクベス』(Macbeth, 1606)においては魔女の予言が有名であるが、A.C.ブラッドリー (A.C. Bradley) が「魔女は単なる物語のきっかけにすぎない」³と主張したことに反論し、『マクベス』に登場した魔女の意義を考察した。社会史的にとらえると、魔女とは貧しい女性であったり、国の宗教政策からはみでた異端と呼ばれる人々であった。異端といっても魔女とされ迫害されたほとんどの人々は女性たちであり、つまり女性たちも男性中心の社会から外に押し出される傾向にあり、また宗教的異端者も中心社会から疎外された人々である。これら女性と宗教的異端を結び付けたのが「魔女」であり、単なる物語のきっかけでは片づけられない当時の社

¹ Raphaell Holinshed, *The True Chronicle History of King Lear and Three Daughters*

² 1605 年一部のカトリック教徒が上院議事場に爆薬をしかけ、ジェームズ 1 世を暗殺しようとしたクーデター。未遂に終わる。(今井 宏編、『世界歴史大系 イギリス史 2 近世』、山川出版社、1990 年、153 ページ)

³ A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*, Macmillan, 1904

会の暗黒の部分『マクベス』の中で表現したと解釈した。「魔女」の存在とは既に悲劇的暗示を帯びているのである。

つまり、両作品が宗教、すなわちキリスト教と深く関わっていると解釈した筆者にとって、シェイクスピアの宗教観の解明は年来の課題であったわけである。

シェイクスピアはその類まれな創作能力で、劇作品や詩を創りだしたが、作品のストーリー、登場人物たちの多様さからシェイクスピアは宗教的な作家とは捉えられてこなかった傾向がある。むしろ、宗教的な要素よりも人間シェイクスピアの方に比重が置かれ、また作品自体も同様に解釈されてきた。しかしながら、シェイクスピアが活躍した当時のイギリス社会は絶対王政と同時に国王が宗教をもつかさどり、政治と宗教は一体化していた時代である。宗教問題は政治に直結し、人々の暮らしは宗教に翻弄されていたといっても過言ではないのである。そうであるならば、シェイクスピアとて同じではなかったらうかと疑問が湧くのである。

そこで、筆者はキリスト教徒としてのシェイクスピアに着目し、当時のイギリス社会の宗教的変遷とともにシェイクスピアの宗教的立場を明らかにしようと試みた次第である。

2.シェイクスピア時代の宗教的背景

2.1 英国国教会の起源

まず、シェイクスピアの宗教観の土台となるイギリス社会における英国国教会の成立の歴史と宗教問題の変遷を『世界歴史大系 イギリス史』(1990)を参考にたどってみたい。⁴

英国国教会の成立はヘンリー8世(Henry VIII)統治下1529年に開かれた宗教改革議会で遡る。シェイクスピアは1564年生まれなので、彼の生まれる35年前にイギリスはローマ・カトリックから英国国教会として分離する道を選択するのである。ローマ・カトリックからの分離のきっかけはヘンリー八世が妻キャサリン(Catharine of Aragon)との離婚を成立さ

せるためであったとされている。妻キャサリンとはスペインとの政略結婚であり、キャサリンが流産、死産を繰り返して、男子の後継者に恵まれなかったこと、また1520年代にはキャサリンの甥のカール5世(Karl V)としばしば対立するようになっていたこと、これらの理由でヘンリー8世はキャサリンとの離婚を成立させたかった。このように、国王の立場として男子後継者を必要としての離婚申し立てであったが、宮廷に仕えるようになったアン・ブーリン(Anne Boleyn)に対しての情熱のせいでもあったことは事実のようである。⁵

結局、1529年の宗教改革議会でヘンリー8世の離婚問題は解決せず、それどころか教皇は離婚問題には非協力的であった。

ところがヘンリー8世は1533年1月頃、アン・ブーリンと密かに結婚し懐妊が明らかとなる。したがって早急に離婚問題を解決しなければならなくなり、1533年3月に議会に「上告禁止法」が提出される。これはイギリスはいかなる外国勢力にも制約されない主権国家であることを主張し、実質上ローマ・カトリックの教皇の支配を受けるのではなく、国内の最高位の教会長であるカンタベリー大司教(Archbishop of Canterbury)の決定が最終決定の場となるようにしたのである。翌月の4月にはカンタベリー大司教により抜擢されたトマス・克蘭マー(Thomas Cranmer)による法廷が執り行われ、ヘンリーとキャサリンの結婚は無効であり、ヘンリーとアンとの結婚は有効であるとした。その年の9月にアンの子が生まれたが、期待されていた男子ではなく後のエリザベス1世(Elizabeth I)が生まれたのである。

さらに1534年に議会で「国王至上法」が制定された。これはイングランド国王はイングランド教会における唯一最高の首長であると宣言した。ここでローマ・カトリックの教会からイギリスの教会は完全に分離し、教皇の支配から独立することとなった。しかしながらイギリスの教会は国王の権限の中に組み込まれてしまったがために、政治と宗教が一体化し、宗教問題は政治問題と直結することとなった。

⁴ 今井 宏編、『世界歴史大系 イギリス史2 近世』、山川出版社、1990年

⁵ 今井 宏編、『世界歴史大系 イギリス史2 近世』、34ページ

ルイス・ネイミア卿(Lewis Bernstein Namier)⁶が述べていたように、16世紀において宗教とは国家主義と同義語であったのだ。こうして英国国教会が生まれたわけであるが、教義上は基本的にはカトリシズムに止まったとされている。

1537年にはヘンリーの三番目の妃ジェーン・シーモア(Jane Seymore)が後のエドワード6世(Edward VI)となる待望の男子を出産し、英国国教会の成立のきっかけとなった後継者問題に終止符がうたれたが、宗教改革は教義の改革が問題となってきた。1536年に英国国教会から初めての信仰箇条の「十カ条」、その翌年には「主教の書」が出され、これはカトリックともプロテスタントともとれる曖昧な表現をとっていた。なぜ曖昧な教義になったかといえ、ヘンリー8世の側近であったトマス・クロムウェル(Thomas Cromwell)は外交面でドイツのカール5世寄りの政策をとっていたのでプロテスタント的立場をとっており、一方でもう一人の側近ノーフォーク公(Thomas Howard, 3rd Duke of Norfolk)は親フランス派でカトリック的立場をとっていた。ヘンリー8世もまたカトリシズムの教義を維持していた。

このことから明らかなように、この当時のイギリス社会では宗教は純粋な信仰としての意味合いではなく、政治的に利用されるものだったことが分かる。

その後ヘンリー8世が没し、ジェーン・シーモアとの間に生まれた男子エドワード6世が王位に就いたが彼はまだ幼少だったこともあり、議会はプロテスタントの摂政が統治の実権をもち、一気にプロテスタントの方向へと流れて行った。しかし次にキャサリンの娘メアリ(Mary I)が王位に就くと、またローマ・カトリックへの揺り戻しが行われ、英国国教会の初期はカトリックとプロテスタントのどちらの立場をとるのか教義が定まっておらず、政治によって左右され、そのたびごとにプロテスタントを迫害する「異端処罰法」があったり、カトリックを取り締まる「六カ条」があったり、イギリス国内の宗教観

は混沌としていたと言えよう。

2.2 エリザベス1世の時代

メアリの死により、1558年アン・ブーリンの娘エリザベスが王位に就いた。このときエリザベスは25歳の若さであったが、彼女は複雑化していた宗教問題にまずとりかかった。メアリの治世に英国国教会はローマ・カトリックへと復帰していたが、すぐさまエリザベスは国王至上法と礼拝統一法を一つにまとめた法律を議会に提出した。しかし議会の中のカトリック信仰の議員たちの抵抗にあい簡単には通らなかったが、1559年に議会の承認を得ることができた。それはプロテスタント色の濃いものであった。

また教会の人事においてエリザベスは、メアリの時代の司教をほとんど解雇し、独自の国教会体制を積極的に整備した。しかしイギリスの人々は、ヘンリー8世以来、国の宗教政策の方針がたびたび変更されるのを目の当たりにしていたので、今回のエリザベスのプロテスタントへという方針は早く終わるのだろうと冷静に受け取っていた。

このように国王が変わるたびに国の宗教的立場が変動するので、個人の信仰は表面上は国の方針によって変わらざるをえないが、個人の真の信仰は密かに変わらずにいた人々が多かったのではないかと推察される。

人々の心配に反して、英国国教会はエリザベスによってプロテスタント化し、それは確立されたものとなった。1560年代以降、英国国教会のプロテスタント化は強まり、さらにそれを強化しようとしたピューリタンと呼ばれる人々が現れてくる。ピューリタンとは「国教会の内外を問わず、教会の現状に不満をもち、より以上の改革を望んでいた人々」と定義され、国教会とピューリタンで大きな教義の違いはなく、国教会の中でもより聖書重視で反カトリックの人々をピューリタンと呼んでいた。

その後1580年代になってようやく英国国教会はイギリス社会に定着したが、それでもなおカトリック教徒は存在していた。貴族やジェントリといった上流階級やイングランド北部地域にはカトリック教徒が多数いたが、はじめエリザベスは英国国教会の法に従っていれば弾圧はしなかった。それはエリザ

⁶ Lewis Bernstein Namier 1888-1960 オーストリア・ハンガリー(現ポーランド)生まれの歴史家。18世紀イギリス議会政治の構造について業績を残した。

ベスが貴族やジェントリたちに協力を求めるためであった。したがって、人々は英国国教会に属しながらもカトリックの信仰を守ることができたのである。

しかしながら、エリザベスのこの寛容な政策は1569年の北部の反乱ののち一変する。1570年にローマ教皇が「エリザベス破門の教書」を發布したことで、エリザベスのカトリック教徒に対する弾圧が強くなっていった。したがってカトリック教徒はイギリス国内から大陸へと亡命する者が多数いた。フランスのドゥエイには亡命者の避難所の役割を担ったドゥエイ神学院が1568年に設立された。しかしイギリスから逃れてドゥエイ神学院に亡命してきたイギリスの若いカトリック司祭たちはイギリスでの布教活動に熱心で、エリザベスの弾圧にあい犠牲者が多くでた。中でもエドモンド・キャンピオン(Edmund Campion)は殉教者として有名である。⁷

一般の人々も、国教会の礼拝を欠席すると罰金を払うことになり、罰金が払えないと財産の3分の2が没収されるようになった。ウィリアム・シェイクスピアはまさにこの頃に生まれ、幼少時代を過ごしたのである。シェイクスピアが生まれた頃は、エリザベスの統治により英国国教会がプロテスタント路線で定着しつつありながらも、まだまだカトリック教徒も存在していたという時代であった。

エリザベスの晩年はウィリアム・セシル(William Cecil)など彼女に仕えた廷臣たちが亡くなり、代わって息子のロバート・セシル(Robert Cecil)など若い世代が議会のメンバーになっていくのを期待と不安で見守ったと言われている。この頃になると、再び政治は不安定になる。原因は若いメンバーエセックス伯(Robert Devereux, 2nd Earl of Essex)の台頭によるものだった。彼は若い宮廷人たちと新しい派閥を作ることを試み、1601年2月に反乱を起こしたが間もなく処刑された。

エリザベスは王位継承者も決定していないなか死の床につき、ロバート・セシルがスコットランドのジェームズ6世(James VI)のもとに使者を走らせ次

期国王はスコットランド王のジェームズ6世に決定したのである。

2.3 ジェームズ一世の時代

1603年4月にスコットランド王ジェームズ6世はジェームズ1世(James I)となりイングランド国王の座に就くと、人々はまたもや国家の宗教方針が変わり振り回されるのではないかと不安に思ったが、1604年1月にジェームズ1世はハンプトン・コート会議を開き、国教会をどう進めていったらよいのかを宗教家と議論した。依然としてカトリックを信仰する人々は残っていたが、エリザベス以来のプロテスタント化路線で進んでいくこととなり、国内のカトリック教徒たちは孤立化していくこととなる。さらに1604年イギリスとスペインが平和条約(ロンドン条約)を締結したことで、イギリスがカトリック国家へ戻るための国外からの介入が断たれた。つまり、カトリック教国であるスペインと平和条約を締結したということは、他のカトリック教国もイギリスをプロテスタント国家からカトリック国家へと改宗させるための宗教戦争を企てるという可能性も期待できなくなったということであった。よって、国内のカトリック教徒たちは落胆し追い詰められていく。そして勃発したのが1605年11月5日の「火薬庫爆発事件」である。これは国王を議場の中で爆殺しようとしたクーデターで、ガイ・フォークス(Guido Fawkes)など関係者は厳しく処罰され、国王はカトリック教徒に対し「忠誠宣誓」⁸を要求した。これ以降、カトリック教徒に対して弾圧が強まっていったとみられる。前述したが、このことは『リア王』の中でも示唆されており、イギリスとフランスが戦争する場面ではシェイクスピアが種本としたホリンシェットの年代記とは反対のストーリー、つまりカトリック国フランスが敗北するというストーリーにシェイクスピアは書きかえている。

⁷ Edmund Campion, 1540-81 イングランドのイエズス会司祭。カトリックを扇動したとしてエリザベス1世のもと捕えられ、処刑された。(今井 宏編『世界歴史大系 イギリス史2 近世』91-92 ページ)

⁸ エリザベス1世に忠誠を宣誓すること。これは主にカトリック教徒、ユダヤ教徒に対して行われた。(今井 宏編『世界歴史大系 イギリス史2 近世』153 ページ)

3.シェイクスピアの生涯と宗教との関わり

3.1 シェイクスピアの少年時代

ウィリアム・シェイクスピアの生涯については、記録として残っているものが数少ないために研究者たちは推測で足りない部分を補って解釈してきた。それゆえに、シェイクスピアは実は別人であったとか、彼は小柄だががっしりとした体型でハンサムだったとか憶測だけが一人歩きしてしまうような説も多々ある。可能な限り事実の忠実に彼の半生を記すと下記のようになる。

ウィリアム・シェイクスピアは1564年4月26日に故郷ストラットフォード・アポン・エイヴオンのホーリー・トリニティー・チャーチで洗礼を受けた。これは記録が残っていて、当時、洗礼は生まれて3日以内に執り行うことが通例であったため、誕生日は4月23日と言われることがあるが、実際のところは分かってはいない。父ジョン・シェイクスピア(John Shakespeare)は、なめし皮職人を営みながら町の議員もしていた。母のメアリー・アーデン(Mary Arden)は裕福な家庭の出身であったが、それ以上のことは分かっていない。

ジョンとメアリーはウィリアムも含めて8人の子供に恵まれたが、成人に達するまで生きられた子供はそのうち5人だった。ウィリアム以外の兄弟たちについてはこれもまたあまり分かっていない。ただここで注目すべき点は、ジョンの実家もメアリーの実家もカトリックだったということである。

教育に関してはキングズ・ニュー・スクールという地元のグラマースクールに通ったと一般的に言われている。しかし通学したという証拠が残っているわけではない。地元の学校であるし、男子で読み書きができれば入学できたということで、自然に推測すればこのグラマースクールに通ってラテン語の教育を受けたと考えるのが妥当であろう。

その後の公的記録は彼の結婚を示唆するものである。それは1582年11月にウスターの教会でウィリアム・シェイクスピアが結婚の申請をしたという記録が残っている。原簿にはアン・ウエイトリーと記載されているが、これはイアン・ウィルソン(Ian Wilson)やビル・ブライソン(Bill Bryson)など多数の研究者が指摘しているようにウスター司教区の書記が

単なる書き間違いをしたようである。⁹なぜなら、人名の書き間違いは他にも多数見つかっているので、アン・ハサウェイ(Anne Hathaway)と書き間違えたと解釈するのは妥当である。ともあれ、ウィリアムはアン・ハサウェイと18歳の若さで結婚し21歳になるまでズンナ、ハムネット、ジュディスという3人の子供をもうけた。

しかし、若きシェイクスピアにとっては結婚と子供の誕生ということで幸福な時代であったが、一方で母メアリー・アーデンのいとこカトリック教徒のエドワードが大逆罪で処刑されたというのもちょうどこの頃1583年の出来事であった。当時のイギリス社会において身内の中の誰かが処罰を受けるということは珍しくなかったはずであるが、この事件はシェイクスピアの宗教観に影響を与えるできごとであった。

彼の誕生から結婚に至るまでの半生の記録的事実は以上である。これら事実の間を縫うように、いろいろなエピソードが憶測されてきてはいるが、確固たる証拠は何もないのがほとんどである。

彼の信仰的側面に注目していく上で最も重要な人物は父ジョンの存在である。前述のように、皮手袋を作るなめし皮職人であったが、それと同時に町の有力者でもあった。そして彼の事業はかなり成功していて羽振りもよかつたらしい。それは彼が次々と不動産を買っていたという事実からである。それでいて、町議会の議員も務めていたことから、事業も成功していて地域の人々のために議員もするような人望のあつた人物だったと研究者たちは推測している。

3.2 父ジョンの没落

シェイクスピア家はここまで順風満帆に生活していたようであるが、1576年あたりから影を落とす出来事が浮上する。それは父ジョンがそれまで常に

⁹ イアン・ウィルソン『シェイクスピアの謎を解く』、河出書房新社、1993年、91-93ページ (Ian Wilson, *Shakespeare: the Evidence, Unlocking the Mysteries of the Man and His Work*, St Martins Pr, 1993)

Bill Bryson, *Shakespeare: the World as Stage*, Harper Collins, 2007

席していた議会を欠席するようになったことである。当時、議員は寄付金を支払わなければならなかった。その負担を軽くするため、議会側はジョンにそれを減免するのであるが、それでも議会を何年も欠席したままであった。ついには新しい議員が選出される。さらに 1578 年頃から事態はますます怪しくなる。それはジョンは不動産を抵当に入れて手放すようになっていったことである。これは不動産取引の記録に残っている。また親族から借金をしていたという事実もある。要するに、それまで成功していた事業が傾いてきたか、何か経済的問題が生じたと考えられるのである。

このことに関しては研究者の意見が分かれている。1570 年代にジョンは 4 回も訴えられている記録が残っている。それは羊毛取引と高利貸しの件で訴えられているが、当時はどちらも違法行為であった。この告発と議会を欠席し不動産を手放したり、借金をしたりという事柄が結びついていたのではないかという見解と、また別の見解がある。それは 1757 年に偶然に見つかったのだが、シェイクスピアの生家の屋根の葺きかえの際に 5 枚のパンフレットが見つかった。それはジョン・シェイクスピアの名前が書かれたカトリックの「信仰上の遺言書」¹⁰であった。この「信仰上の遺言書」とはカトリックの信仰告白の書であり、ウィリアムの父ジョンは密かにカトリック教徒であったと考えられる。1575 年以降ジョンが借金に苦しんでいたように見えるのは、当時カトリック教徒が用いたカモフラージュであったのではないか、ということである。カトリック教徒は国教会の礼拝に欠席すると罰せられるので、それを避けるために借金をして財産がないように見せかけていたのではないか、という見解である。

ジョンが実際、どういう理由で突然に議会を欠席しだしたのか、また借金をしだしたのかという原因は

¹⁰ この「遺言書」の原文は 1757 年に発見され、1790 年にシェイクスピア学者エドモンド・マロウンによって筆写されたがその後行方不明になる。しかし 1638 年に印刷された同様の「遺言書」が発見され、これが確かにジョン・シェイクスピアのものである可能性が高くなった。(イアン・ウィルソン『シェイクスピアの謎を解く』633-37 ページ)

断定できないが、屋根裏から見つかった「信仰上の遺言書」は確実に父ジョンのカトリック信仰を裏付けている。

3.3 シェイクスピアの学生時代

また信仰のもう一つの手掛かりとして、彼が通ったとされているグラマースクールはカトリック的傾向が強かったとされている。シェイクスピアが学んでいたときと同時期にサイモン・ハント(Simon Hunt)という教師がいた。彼は後にフランスのドゥエイ大学に入学したようである。ドゥエイ大学とは前述したが、イギリスにカトリックを布教するための司祭を育成する大学として創設され、実際イギリスから逃れてきたカトリック教徒たちの本拠地となった場所である。またグラマースクールの同窓生ロバート・デブデイル(Robert Debdale)もまた卒業後、ドゥエイ大学に入学した。これだけの理由で、ウィリアムもカトリックを信仰していたと結論づけることはできないが、少なくとも地元のグラマースクール、キングズ・ニュー・スクールではカトリックに対して寛容であったということがうかがえる。そのような、宗教的に自由な空気の中で少年時代を過ごし、また父ジョンがカトリック教徒であったとすると、家庭の中においても自然にカトリック的思考や習慣が身につけていたと推察できる。

3.4 シェイクスピアの晩年

その後、故郷ストラットフォード・アポン・エイボンを経て、ロンドンで劇作家として華々しい活躍をしたのは周知の事実である。彼がロンドンで初めに俳優として生活していた頃、ジェームズ・バーベッジ(James Burbage)の劇団にいた。彼の住まいはそのジェームズ・バーベッジの劇団が建てた「劇場座」があるショアディッチであると考えられている。明確な居住記録はないものの、ジョン・オーブリー(John Aubrey)が書いた『著名人小伝集』(*Brief Lives*, 1898)によると「ウィリアム・シェイクスピアはショアディッチに住む」との記述がある。ショアディッチ周辺は俳優など劇場関係者が多く住み、おそらくシェイクスピアもそこに住んでいたのは間違いないであろう。

1597年には故郷ストラットフォードでニュープレイスを購入し、翌年1598年にはニュープレイス在住という記録がある。シェイクスピア34歳のときである。

また興味深い事実が1606年に記録されている。それはシェイクスピアの3人の子供たち、スザンナ、ジュディス、ハムネットが国教忌避者の名簿に記載されているということである。父ジョンがカトリック教徒というだけでなく、子供たちも国教忌避者というレッテルを貼られていたということは、シェイクスピア自身もカトリックを信仰していた可能性は濃厚である。

1613年3月には再びロンドンのゲイトハウスを購入している。シェイクスピアが購入したとされるゲイトハウスは当時彼が経営していた「ブラックフライアーズ座」に通じるフライアーズ地区にあった。ゆえに、彼は仕事場に近い場所に単に不動産を購入したとも言える。また、この件について単なる投資だとみなしている研究者たちも少なくない。しかしながら、気になる点はシェイクスピアが購入した建物はロンドンの中でも最もカトリック色の濃い場所であったと伝えられている。

1593年カトリックを厳しく取り締まる法案が議会を通過し、カトリック迫害が一段と厳しさを増した頃、ゲイトハウスにはカトリックの司祭が出入りしていた。ゲイトハウスには裏道や横道や隠れ場所があり、司祭を匿うのには事欠かなかった。このようないわくつきの場所をニュープレイスよりも高額のお金を支払って購入したのは、職場に近いという表向きの理由だけではなく、カトリック信仰と何か関わりがあるのではないかと疑問視する研究者もいるのはうなずける。¹¹このゲイトハウスの購入はシェイクスピア一人ではなく、他に劇場関係者3人と共同購入している。

4. 「信仰上の遺言書」から見えるもの

シェイクスピア時代の宗教の変遷と彼の生涯から、シェイクスピアは一体どんな信仰をもっていたのか

を考察するとき、彼の人生においてカトリックと無関係ではないことが分かる。

歴史を鑑みると、イギリスの宗教史はローマ教皇を頂点とするローマ・カトリックの傘下から独立しようとする宗教的独立の歴史ともみてとれる。しかしそれが政治と宗教の結び付きに拍車をかけ、宗教問題は政治問題に直結する結果となり、イギリス国家は激しいカトリック迫害にもつながったのである。そしてイギリスの人々は国王が変わるたびにプロテスタントの英国国教会なのか、それともローマ・カトリックなのかで翻弄されるという弊害も生じたのである。『マクベス』の魔女もそうした不安定な政治と宗教との関わりから生じた産物であると言えよう。したがって、英国国教会徒として生活していた人々も、内心カトリックを信仰していた人々もかなりいたに相違なく、実際そうであった。それは知識教養のある貴族やジェントリに比較的多かったようであるが、それは当時の記録として貴族やジェントリのような上流階級の人々の名前しか記録に残されていないということであって、一般庶民には少なかったのかというと、そんなことはないはずである。ただ、一般庶民の人々の詳細な信仰が記録として残っていないだけである。ましてや国家の方針に逆らうような信仰が記録として後世に残ることは不自然である。こう考えると、英国国教会を生活の支障がないように表面的には信仰しているが、実際は隠れたカトリック教徒であったという人の潜在的な数は実はかなり多かったのではないかと推察される。

そんな時代の中であって、それではシェイクスピア自身の信仰はどうだったのかというと、1757年にシェイクスピアの生家の屋根裏から発見された「信仰上の遺言書」のサインが紛れもなく父ジョン自身がサインしたものだとする、少なくとも父ジョンは隠れたカトリック教徒であったと解釈することが正しいだろう。ビル・ブライソンなどの研究者たちは、イギリスの国家的詩人で劇作家であるシェイクスピアの父親が、カトリック教徒だったなどという見解は馬鹿げている、と主張している。¹²しかしな

¹¹ イアン・ウィルソン、『シェイクスピアの謎を解く』507-31 ページ

¹² Bill Bryson, *Shakespeare: the World as Stage*, Harper Collins, 2007

がら、記録として残されたもの、そこから冷静に客観的に判断すると、間違いなく父はカトリックの信仰を手放してはいなかったと解釈することが妥当である。もともと、ジョンの実家も母メアリー・アーデンの実家もカトリックであったということから判断すると、ジョン・シェイクスピアが子供時代の信仰を生涯ずっと持ち続けたとしてもそれは全く不自然なことではないのである。

さらにスザンナ、ジュディス、ハムネットが国教忌避者に名前を連ねているということはシェイクスピア一家がカトリック教徒であったと判断できる。ただし、国教忌避者の名簿というものがどれほどの正確性があったかという疑問もある。

シェイクスピア自身はというとどうだったのであろうか。父ほど積極的に隠れカトリック教徒だったと判断する資料は乏しいが、彼のロンドンでの居住区、子供たちの国教忌避者名簿の記載、それらを総合的に判断するとシェイクスピア自身、国教会徒という仮面は被っていたものの、家庭においてもグラマースクールにおいてもカトリックの教育を受けて、カトリックの信条を持ちながら生活をしたと言うのが妥当であろう。ただし、彼がカトリック教徒だったという証拠は何一つないのである。よってピーター・ミルワード(Peter Milward)は「シェイクスピアは隠れカトリックだったのではないか」¹³と主張しているが、しかし断定することはできないということが実際のところである。

それではどのような解釈が妥当かという、やはり英国国教会徒として生涯を送ったことは間違いのないことである。表面上にせよ、そうでないにせよ、国教会を支持していなければパトロンの庇護のもとで宮廷の中で演劇を上演することがとうていできなかったということは周知の事実である。ただ、彼の胸の内にそれ以上の信仰があったかどうか、つまり密かにカトリックを信仰していたかどうかと言えば、それはおそらくカトリックを信条としていたと思わざるを得ない。オルダス・ハクスリー(Aldous

Huxley)が、「シェイクスピアの信条は簡単には答えられない」¹⁴と述べているのも真実である。シェイクスピア周辺の重要な資料はあるものの、肝心な彼自身のことに関して記録も伝聞もないからである。何とも歯がゆい思いである。

5.終わりに

シェイクスピアの宗教観を明確に確定することは難しいが、これまで述べてきたところから、筆者の現時点での見解を記せば、彼は英国国教会というプロテスタントの宗派に属しながらも比較的寛容にカトリックの信仰も取り入れていたのではないかと、ということである。そしてそれは、決して珍しいことだったわけではなく、当時の人々にとって自然なことであったと言える。君主が変われば国教も変わるという不安定な時代を生き抜くために、人々は信仰においてかなり寛容に受け入れ生活をしていたのであろう。シェイクスピアも例外ではなく、正にそういう時代を俳優として劇作家として柔軟に生き抜いた天才であると言えよう。

そしてこれに関しさらに検証するためには、やはりシェイクスピアの書いた作品自体を様々な角度から丁寧に読み解かねばならないだろう。そうすることで、彼の作品世界においてキリスト教がどのような次元で関わっているかを見極めることで、より具体的な宗教観が明らかとなるだろう。

(Received:September 30,2011)

(Issued in internet Edition:November 1,2011)

¹³ ピーター・ミルワード著、中山 理、安田 悦子訳 『シェイクスピアは隠れカトリックだった？』春秋社、1996年 (Peter Milward, *Shakespeare's Religious Background*, Indiana University Press, 1973)

¹⁴ Aldous Huxley, "Shakespeare and Religion," <<http://www.sirbacon.org/links/huxley2.htm>> (2010年9月22日)